第２９号　【上西集落支援員だより】　2020年12月10日（木）

上西集落支援員だより

西之表市地域支援課
上西集落支援員
馬場 信一　編集
連絡先090－9579-3953
上西校区長責任発行

◎大広野神社と銅鏡

大広野神社

大広野神社で銅鏡発見

平成15(2003)年、大崎大広野神社でおよそ1,300年前の銅鏡五面が見つかり、話題になりました。発見および発表に直接関わり、現在大広野神社の世話役をされている河口修さんを訪ねました。

社殿の上手に

左:大山祇神祠
右:宇母智神祠

～銅鏡発見まで～

昭和43（1968）年、下野敏見先生が民俗伝承調査のため大広野の河口末男さんを訪問。その折、大広野神社を案内され、銅鏡が奉納されていることを知る。

当時先生は多忙を極めており、「貴重なものだから大事に保管するように」と伝え、三十年の時がたった。

橋口尚武氏が右手に持つのが銅鏡
（小型海獣葡萄鏡　五面の中で最大）

かつて　種子島は　ひとつの国だった

824年、大隅国に属するまで702年からの122年間は多禰国 として存在。

大和朝廷との交流を示す記述が『日本書紀』等に見られ、国府役人の往来や時に位の高い人物が種子島に配流、また遣唐使が寄港したとある。

～なぜ銅鏡が大広野神社に？～

大広野は種子島家の重要な鹿倉(狩猟場)だったので古来、山の神を祀ってきた。銅鏡はその祠にあった。

もともと大広野は火立ノ峰で烽を上げる役人の集落だった。彼らは山頂で火の神（太陽神）を拝んだと考えられる。(右：天道祭の写真)

よって大広野神社は火の神と山の神の大山祇神を、明治に入り種子島家の馬頭観音の宇母智神を祀った。

多禰国時代とその前後に大和朝廷との交流があったことから、銅鏡は奈良時代に何らかの経緯で持ち込まれたと考えられる。

（右上：かつて種子島は～参照）

～烽の役割と人々の生活～

火立ノ峰の隣りに国見山、住吉の火立が峰、島間の火合ノ峰と合わせて四か所が軍防や見張りをして、大隅の国府と屋久島とに合図する役割をもつ。

「烽を上げる役人なので給料をもらえる。しかし、それだけでは生活できないので、田畑を開いた。わずか十世帯の集落であり、数人ずつ交代で烽を上げた」と河口さんは語る。

烽：画像は（株）LIG

穂垂れ引きと天道祭　昭和44年

大広野 河口末男さん宅

1月15日の朝、カシワガユの粥を炊くとき、その煮汁にワラの先を浸してスクボ（籾がら）にくっつけ、稲が実ったようにして、十字の切込み入り（天道＝太陽）の箸でしごき落とすまねをする。これを穂垂れ引きという。太陽に感謝し、豊作を祈る。

～まとめ～　銅鏡発見の経緯をたどると烽の制度とも結びつきます。大広野は小さな集落ですが、歴史の奥深い位置に存在する集落なのです。

参考文献「種子島（大広野神社）の小型海獣葡萄鏡」2003.2.7　下野敏見/橋口尚武
「鹿児島県種子島の鏡について（１）」2007.10 橋口尚武
「西之表市の民俗・民具　第１集」1997.3.30　西之表市教育委員会発行